

パーキンソン病について	1ページ
こんなことしてます三重病院レポート「夏の子ども教室」「安全対策カーブミラー設置」/医療福祉相談室だより「今月のイチオン図書」	2ページ
〈流行注意報〉赤い発疹は…? 風疹とりんご病が流行っています / 「糖尿病教室9月」のお知らせ	3ページ
アレルギー教室のクッキング / 外来ニューフェイス紹介 / 植物を探せ! vol.21 / 外来からのお知らせ / 外来診察のご案内	4ページ



よく耳にするパーキンソン病って、パーキンソン病について どんな病気でしょう?

パーキンソン病は約200年前、イギリスの開業医であるジェームス・パーキンソンにより報告されました。それまでにもパーキンソン病と考えられる病気についての記録はあるのですが、はっきりとした疾患としての報告はこれがはじめてのようです。

パーキンソン症候群とパーキンソン病は違うのかとよく質問されます。パーキンソン症候群というのは、**寡動(動きの少ないこと)・固縮(こわばり)・安静時振戦(ふるえ)・姿勢反射障害(転びやすいこと)**という症状の組み合わせのことで、このパーキンソン症候群のなかにパーキンソン病が含まれています。パーキンソン症候群にはパーキンソン病以外にも進行性核上性麻痺や皮質基底核変性症などがあげられます。

パーキンソン症候群の中で、**パーキンソン病の特徴**と言えばやはり**L-ドーパ**という薬がよく効くということがあげられます。神経内科の病気は治らないとよく言われます。けれども治るとまではいわないまでも、症状のよくなる病気はたくさんあって、パーキンソン病はその代表的なものと言えます。ずっと昔「レナードの朝」(これはパーキンソン病ではなくて脳炎後のパーキンソン症候群の話ですが)という映画があって、そのなかで本当に寝たきりであった患者さんがL-ドーパという薬をのむことによって起き上がり、歩き始めることがえがかれていました。確かに寝たきりであった人が、L-ドーパを服用しはじめて少しよくなり、次第に量を増量することにより歩き始めることは、神経内科医であれば経験があると思います。昔パーキンソン病という病気は治療法がなく寝たきりになってしまう病気であったわけですが、今では少しは不自由かもしれませんが何とかやっけていける病気であると思います。

脳の深部には神経核と呼ばれる神経細胞の集まりがあります。中脳という部分にある黒質という神経核がパーキンソン病という病気の場合です。黒質

というのは名前の通り肉眼で少し黒く見えます。これは黒質の神経細胞がメラニンという色素を含んでいるため、この神経細胞はドパミンという神経伝達物質を、これも脳の深部にある基底核という神経核に送っています。原因ははっきりしていませんが、パーキンソン病ではこの黒質の神経細胞の数が普通よりも速く減少してゆきます。だから、パーキンソン病の症状は黒質から基底核にドパミンが送られなくなり、基底核のドパミンが減少することが原因となります。若い時には約60万個の黒質神経細胞があり、この神経細胞数が20万個より少なくなるとパーキンソン病の症状がはっきりするといわれています。

もちろん年齢とともに黒質の神経細胞も減少し、高齢になってこの神経細胞が20万個よりも少なくなるのは約105歳であるそうです。だから人間はだれでも105歳を過ぎるとパーキンソン病になってしまうわけです。この点から考えるとパーキンソン病の原因は老化の問題と関係しているのかもしれませんが。

神経内科の病気のなかで原因のはっきりしない病気を変性疾患と呼びますが、変性疾患については遺伝性の例からその全体的な原因を探そうとする試みがなされています。パーキンソン病の原因と考えられる遺伝子がたくさん同定されていて、これらの遺伝子は細胞の老化と関係するものがたくさんあります。**40歳以下で発症する若年性パーキンソン病**については遺伝子との関連があるということですが、多くのパーキンソン病については関係がなさそうです。

そのためパーキンソン病発症の原因として、**環境因子**についてもよく言われています。MPTPという化学物質があって、この化学物質は黒質の神経細胞を破壊することが知られています。麻薬中毒患者の中にパーキンソン症候群を発症した例があり、これは違法に合成された麻薬の中に不純物としてMPTPが含まれていたことが原因であるようです。自然環境の汚染は次第に進んでいます。MPTPのような黒質に毒